

青年期の男性性形成に関する一考察 — 大学生の事例から —

多賀 太 (九州大学大学院)

1. はじめに

本発表は、青年期男性の人間形成における主体的側面を、ジェンダーの視点でとらえようとするものである。

エリクソン (訳1969) は青年期の社会心理的側面を特徴づけるものとしてアイデンティティ危機をあげ、アイデンティティ形成を青年期の主要な発達課題とした。エリクソンのいうアイデンティティ形成とは、幼児期以来の様々な同一化を選択的に拒否し、相互に同化し、新しく配置し直すというきわめて主体的な営みから生じるものである。

男女の役割が流動化しジェンダーに関する価値観が多様化している今日、青年たちに与えられている課題とは、一人前の男(女)性になることというよりも、どのような男(女)性になるかの決定であるといえよう。そこに、青年期の発達課題としてのアイデンティティ形成をジェンダーの視点から考察する意義がある。

さて、これまでの青年期のジェンダーに関する研究は、どちらかといえば女性に焦点をあてて行われてきた。なぜなら、エリクソンをはじめとする、ジェンダーの視点を取り入れられる以前の青年研究のほとんどは男性＝人間一般という暗黙の合意のもとに行われており、ジェンダーの視点をもつ研究の主要な目的は、それ以前の諸研究によって見落とされてきた女性の実態を可視化することにあったからである。その意味では、すでに研究されている男性に改めて焦点を当てる必要はなかったといえよう。

しかし、以下のような近年の新たな状況によって、改めて男性に焦点を当てた青年研究の必要性が生じてきた。①そうした女性の視点から青年期を捉えようとする諸研究が女性の実態を可視化するに従って、男性もまた人間一般などではなくて、女性ではないもう一方の性であることを再認識さ

せられた。②フェミニズムのインパクトによる男女平等理念の浸透や、女性の社会進出とあいまった社会構造の変動によって、男性に期待される役割が変化してきた。

以上の問題関心にもとづき、本発表では、青年期男子に対する聞き取り調査の結果をもとに、彼らがいかにしてアイデンティティ形成を行い、そこにジェンダーがどのように関わっているのかを明らかにする。

2. 分析の枠組

(1) ジェンダー・アイデンティティ

ジェンダー・アイデンティティという概念を用いた研究は、性科学の分野において始まった。ストーラー (訳1979) によれば、ジェンダー・アイデンティティには、「私は男(女)である」という感覚(中核的ジェンダー・アイデンティティ)と、「私は男(女)らしい／らしくない」という感覚の二つの側面がある。これらのうち、性科学の主たる関心は前者、すなわち「男(女)である」という感覚の形成にある。通常、こうした感覚は3歳頃までに形成され、いったん決定されると修正不可能になるとされている。

一方、社会学におけるジェンダー・アイデンティティ研究の関心は、どちらかといえば後者に置かれており、中核的ジェンダー・アイデンティティの確立は自明のものとされていることが多い。つまり、そこで問題とされるのは、「男(女)である」ことに対して向けられる発達段階と社会的場面によって異なる様々な期待に直面するなかで、すでに「私は男(女)である」という感覚を身につけた個人が「私は男(女)らしい／らしくない」という感覚を維持・形成する側面である。

では、社会学のアイデンティティ研究において、「ジェンダー・アイデンティティ」の概念はどの

ように位置づけられうるだろうか。ゴッフマン（訳1970）は、社会的カテゴリーによって性格づけられる個人に対応する「社会的アイデンティティ」と、他の誰とも異なるかけがえのない個人に対応する「個人的アイデンティティ」を区別して用いている。ジェンダーが社会的カテゴリーの一つであるならば、ジェンダー・アイデンティティは個人に付随する複数の社会的アイデンティティのうちの一つといえる（そして、そうしたジェンダー・アイデンティティを表出する様々な役割の総体が「性役割」である）。ただし、人生の最も初期に形成されその後訂正不可能であるという性質からして、ジェンダー・アイデンティティが個人のアイデンティティにとってもつ意味は、他の社会的アイデンティティに比べて非常に大きいといえるだろう。

（2）アイデンティティ危機とアイデンティティ形成

ジェンダー・アイデンティティを以上のように理解するならば、男性のジェンダーをめぐるアイデンティティ危機を次の2つのレベルでとらえることができる。①ジェンダー・アイデンティティ内部での葛藤、すなわち発達段階や社会的場面によって異なる複数の望ましい男性像の間の葛藤。②ジェンダー・アイデンティティと個人的アイデンティティとの葛藤、すなわち社会から期待されている（と個人が見なす）男性像と自己像との葛藤。

さて、こうした葛藤の克服において重要なのが、「共通のイメージ、観念、理想像からなる首尾一貫した体系」としての「イデオロギー」である。エリクソンによれば、「アイデンティティとイデオロギーとは、同一過程の二つの側面」である。例えば、伝統的性役割規範と男女平等理念という異なるイデオロギーの間での葛藤を経験した個人は、どちらか一方のイデオロギーにコミットすることで葛藤を克服し、アイデンティティを確立するかもしれない。また、全体社会が期待する男性像と自己像との間の葛藤を経験した個人は、全体

社会において優勢なイデオロギーにコミットして「否定的アイデンティティ」を受け入れるかもしれないし、逆にそうした期待に沿えるよう自己変革するかもしれない。あるいは、自己像を肯定的にとらえるような別のイデオロギーにコミットし、「肯定的アイデンティティ」を獲得するかもしれない。

このように、個人はアイデンティティ形成の過程で、特定のイデオロギーにコミットすることで、アイデンティティ危機を克服する。以下の事例研究では、青年期男性が直面した（直面している）ジェンダーをめぐるアイデンティティ危機がいかなるものであり、いかなる経験を経て、いかなる「イデオロギー」にコミットすることでそうした危機を克服してきた（克服しつつある）かを明らかにする。

（3）調査方法

就職を目前に控えた大学4年生男子（一部就職浪人を含む）に対して発表者が個人面接および集団面接を行った。了承を得られた場合にはテープに録音した。主な質問項目は、「将来の自己像（職業・家庭・趣味など）」「男性性に対する評価」「男性としての自己評価」「準拠集団」「家族や学校における経験」であり、その他にもそれらと関連づけてジェンダーに関する様々な質問を行った。

3. 事例研究

当日、詳しい資料を配布する。

主要参考文献

- エリクソン, E.H. 著、岩瀬庸理訳『主体性－アイデンティティ－』北望社、1969年
- ゴッフマン, A. 著、石黒毅訳『スティグマの社会学』せりか書房、1970年
- ストローラー, R.J. 著、桑畑勇吉訳『性と性別』岩崎学術出版社、1979年